



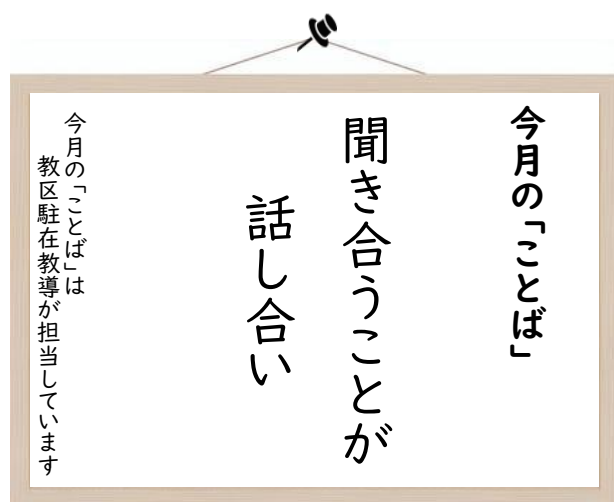
2022.
10 月号
第 390 号

真宗大谷派京都教区 教化広報誌

教区だより

Shinran
SS500th

へんげんてい
南無阿弥陀仏
人と生まれたことの
意味をたずねていこう



CONTENTS

2面

「連載」第17回
悲しみが通じあう時
—愚禿悲歎述懐を通して—

よつつじ あきら
四衢 亮氏

3面

「今、この時に、
親鸞聖人に会う」
山城第3組

あさい みな
浅井 美奈氏

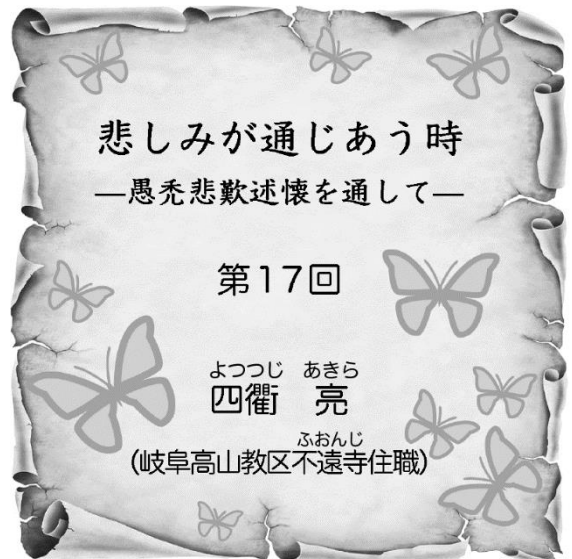
4・5面

「特集」
同和協議会現地研修会
水平社創立100年
揺籃の地を訪ねて

6面

教務所からのお知らせ

イマダカニ



仏法あなずるしるしには

比丘比丘尼を奴婢として

法師僧徒のとうとさも

僕従ものの名としたり

(聖典五一〇頁)

世の中が仏法を軽んじている証拠として、比丘や比丘尼を奴婢として用い、尊い法師や僧徒の名を、僕従するものの名として使っているあり様である、という意味になります。この和讃は、この前の和讃の「末法悪世のかなしみ」の内容として続いて詠われたものです。

法師や僧徒を表す言葉を僕従の名とする。僕従

とは、辞書によれば「めしつかい、しもべ、従僕」のことです。具体的には「坊主」という言葉には、

「昔剃髪する習慣があったところから、男の幼児を、親しみまたはあざけりの気持ちをこめて呼ぶ語。男女に関係なくいうこともある」「三日坊主、いたずら坊主、など、ある語に添えて、他人に対する親しみ、またはあざけりの意をあらわす語」という解説があります。また「小僧」という言葉にも、「こども。また、特に、年少の男子を見下げていやしめていう語。こわっぱ。小僧っ子」(いずれも『日本国語大辞典』による)とあります。

親鸞聖人の時代にはすでに、法師や僧徒をあらわす「坊主」などの言葉が、人を僕従とあざけり、卑しめて言う言葉となっていたのでしょう。そしてそれは、仏教を表し、仏教を世に示す存在である法師や僧が、あざけり、卑しめる言葉として抵抗感なく使われる世であるということは、世に於いて仏教があざけりを受け、卑しいものと見られ、扱われているということなのです。その世を親鸞聖人は「末法悪世」と言われているのです。

仏教があざけりを受け卑しいものと見られ「仏法あなずる」原因が、「比丘比丘尼を奴婢」とすることにあると親鸞聖人は見ていらっしやいます。奴婢とは「家に隷属して雑仕事に召し使われる男女」と辞書に解説されます。比丘比丘尼が召使になっ

親鸞聖人の和讃の中に「現世をいのる行者」という言葉があります。現世をたのみ、現世を祈る

というのは、この世において力を持ち、世を動かす力をたのみとする存在のために祈るということです。力による安穩を祈願し、力によって平らげるために戦勝を祈願します。五穀豊穡を願い、病気の平癒のために加持祈禱を行います。そのことは愚禿悲歎述懐では、「良時吉日をえらばしめ」「卜占祭祀をつとめとす」とありました。

力ある権力者が、自身や身内の菩提をとむらうために寺院を建立するなら、それに従い協力し、菩提をとむらう祈禱に明け暮れる。五穀豊穡と一族に繁栄を願えばその加持祈禱を行い、吉日や吉方を占い要望が叶うために祈るのです。

それは、果てしの無い人間の煩惱に仕え、命ずるままにその拡大をはかるものです。煩惱を明らかにし、その煩惱がつくるこの世の五濁に目覚め、それを課題にする道を示す仏教が、その意味を完全に見失い、煩惱に仕えそれを正当化する道具と化している。それが「比丘比丘尼が奴婢となる」ということでしょう。加持祈禱の効力があればいい、無かったり無くなったりすれば使い捨て、そんな煩惱の道具となったことで、仏教が世の信頼を失い、あざけりを受けるものとなっていることを、親鸞聖人は憂い、悲しみとされています。

「今、この時に、 親鸞聖人に会う」



「ご縁に遇わせていただいて」

京都教区山城第三組皆演寺坊守

あさい みな
浅井 美奈

夫と出遇わせていただいたこと、子どもたちが生まれ、ともに生活していくことを通して、浄土真宗の教えにご縁をいただいたとしみじみと思います。

私は生まれてからずっとお寺で育ったわけではありません。

郊外のごく普通の戸建に住み、別院の列座であった父と近所でパートをしていた母に育てられ、どちらかといえば在家というもののに、近い暮らしをしていた私に、真宗の教えにふれる機縁になってくれたのは、母方の祖父母

でした。在家ではありませんが、「仏さんのことは大事にするものだよ」と、熱心な真宗門徒である祖父母は私が阿弥陀経を練習すると「えらいえらい」と褒めてくれて、大切に育ててくれました。思春期と反抗期の境目の年頃に父が父方の祖母の実家への入寺を決めたときには、私がお寺の跡取りになることがなんとなく決まっていた、そんなもんかという気持ちと騙された気持ちが少しありました。

大谷大学で真宗大谷派教師資格を取得した後、父が元気なうちとはと、一般企業に勤めました。日々仕事に忙殺されていると、しばらくして夫と出遇わせていただきました。

結婚したことで、私が離れていた自坊や教区の方々との関わりも増えました。夫は、恩師や聴聞したご法話の話をよく聞かせてくれます。私も大学時代の先生がこうおっしゃっていた、こんな本を読んだ、講義がこうで：という、「そうかそうか」と話を膨らませてより深く話してくれます。

しかし、夫はあまり気がつかない性分です。で、喧嘩はしょっちゅうですし、憤りを感じるときも多いのですが、そんな時は大学時代に学んだ『恵信尼消息』を思い出します。恵信尼さまが親鸞聖人を観音さまの化身であ

ると思ったように、夫は私に仏教と向き合う為に出遇わせていただいた人なのだと思います。ときには、なるべく早めに仲直りできるようにしています。

自坊の催しに関しては、夫が子ども会をしようとする案、組内の先輩方の集まりに参加しようとする案を聞いてくれるので、親しくしてくれる方々との良い出遇いをいただきました。子ども会では、私の友人や子どもたちが生まれてからのママ友さんたちに参加していただき、これからのご縁に繋げていければと思っています。

昨年、夫が住職を継承し、私は坊守となりました。なかなか慣れない状況で、苦勞も失敗もありますが、周囲の方々の協力のおかげでなんとかやっていけております。坊守となったことで、今まで関わらなかった事や出会えなかった人との出遇いをいただきました。これから少しずつ勉強させていただきたいです。

両親、祖父母、夫、子ども、親戚縁者の方々、ご門徒、友人、そして教区の先輩方々に支えられ導いていただけるご縁をいただけたことが、誠に幸いなことだと思って、お念仏申していきたいです。

特集 教区同和協議会 二〇二一年度 現地研修会

ようらん

水平社創立百年 揺籃の地を訪ねて

五月十九日、水平社発祥の地奈良県御所市柏原の水平社博物館と西光寺において、同和協議会の現地研修会をおこなった。今年は水平社創立から百年にあたり、博物館もリニューアルされたことを機縁として、再度当時の人々の差別からの解放の精神に学ぶべく開催した。



ガイドの堀出氏

まず、二十一名の参加者が二つのグループに分かれ、博物館内の見学と、周辺のフィールドワークにそれぞれガイドさんの案内で出かけた。

リニューアルされた博物館内の展示は、プロローグ「もつとあたたかい人の世を」～「人間の尊厳を求めて」～「人権の確立を求めて」～「よき日を、君の手に」～「人の世に熱あれ、人間に光あれ」～「踏みにじられた尊厳を取り戻すため」～「ともに人間の尊厳の実現へ」～エピローグ「あ

なたの心に残った言葉は」という流れで構成されていた。

熱心に案内してくださった若いガイドさんのような若者が増えることを願い、そして参加された方々と共に展示されている写真や文章から当時の人々の願いを熱く感じ取り、人の世にあたたかな光をもたらす力添えができる仲間になれることを切に願った。



フィールドワークでは、ベテランのガイドさんのもと「いのち燦燦の燈」を皮切りに、記念碑「解放令からの五万日目」～西光寺～駒井喜作宅跡～燕神社～阪本清一郎生家跡～同宅跡～水

平社宣言記念碑～神武天皇社～誓願寺を訪ねた。

随所での説明には力がこもっており、差別を決して許さないという揺るぎない信念と、差別と闘ってこられた先人の誇りを垣間見ることができた。頭が下がる思いであった。

りゅうだん

続いて、西光寺に向かい、清原隆宣住職のお話を聞いた。



冒頭、清原師は、

「今年は水平社創立百年にあたりますが、百年たっても差別はなくなりません」と、唇を震わせ目に涙をためて語り始められた。自身の経験を交え、時にユーモラスに時に

深刻に部落差別について語られた。中でも教員時代の後輩の自死については、深刻な差別の現実をわれわれに突きつけてこられた。

結婚を約束していたその後輩は、生まれが被差別部落であったがために相手方から猛反発を受け、自死を選んだ。清原師は後輩の自死を防げなかった後悔と、差別に対する憤りを吐露された。

「被差別部落に生まれただけでなぜ死ななければならぬのか?」「被差別部落に生まれると思つて生まれた人間はいない」「たまたま被差別部落に生まれただけ」……。

不条理な差別への怒りと、拭い去れない部落差別の厳しさを教えてくださった。そして、決して部落差別の解消をあきらめず、努力し続ける闘志を垣間見ることができた

直面している「是旃陀羅」問題についても、これまでの部落差別にかかわる諸問題においても、加害者の自覚を促す運動に重点をおき、被差別者に対する救済が留守になっていったように思う。

差別を受けてきた人々の苦しみ辛さを自身に感じ、心の叫びをしかと受け取らない限り、この問題は堂々巡りになるように思う。

教区同和協議会 副会長 川端 裕敬 かわばた やすひろ



今回の現地研修会で、水平社博物館の館内展示について、博物館ガイドとして案内してくださった堀出幸子氏(滋賀県在住)にお話をうかがいました。

—— 博物館ガイドになられたきっかけを教えてください。

大谷大学短期大学部(現在は廃止)在学中、人権学習のなかで博物館のことを知り、訪れてみたことがきっかけです。展示されていた創立に関する水平社自身の発行物には、誤字脱字や、何度も推敲を重ねた跡が生々しく、また、当時の新聞記事などにも教科書上の言葉ではない生の声がありました。「暗い」「重い」とくくられがちな部落差別問題ですが、生き生きとした水平社の理念に出会い、ワクワクと夢中になって展示を貪り読んだことを覚えています。



ガイドの堀出幸子氏とねこ

以来、博物館の方々に、短期大学部、その後進んだ文学部在学中の研究テーマについて相談するなど交流が続き、卒業後、博物館ガイドに登録しました。

—— これまでの博物館ガイド経験から、どのようなことを感じておられますか。

二〇一五年よりガイドを始めてから、年間六〇〜七〇回程度ガイドをしています。ガイドを通して人とであり、そして、水平社の歴史にであう中で、もともと自己を表現できないタイプでしたが、自身が生きやすくなり、今は、生きることが楽しく、いとおしいと感じています。

人権についての学びとは、私たちが生き生きと生きるためのものだと思います。人権問題が重いのは当然だと言えます。人間の生(生活・人生・生命)が主題だからです。流して軽く生きるよりも、その尊い重さを自覚して生きたいです。人を、そして自分自身をあきらめ、軽んじて生きることをもう

繰り返えしたくありません。そのことが痛ましい世の中をつくっていると知りました。悲しみながらも私自身は加担者でした。

—— 博物館ガイドとして、大切にしていることを聞かせてください。

水平社はすごい、水平社同人のような生き方は自分には無理だ、と自分とは別事のようにとらえるのではなく、私たちも水平社のようになり得るのだ、という視点を大切にしたいと考えています。敬愛する先生から教えていただきましたが、釈尊の前身物語の中に、燃灯仏授記物語と呼ばれるものがあります。燃灯仏という仏陀と出遇って、私もあなたのような仏陀になりたいという誓願をおこし、菩薩としての歩みをはじめたメーガ青年(前生における釈尊)のように、私は水平社創立の精神に出遇って、自分の人生を歩みだす勇気が生じました。

水平社の創立に真宗の僧侶や門徒らが深く関ったことに焦点を当てがちですが、私たちは水平社が生まれなければならなかった世の中をつくりつけてきたことに、目を向けるべきだと考えています。ひとつの社会事象というだけでなく、人間の生を促す普遍的な願いが、水平社創立の理念にあります。その促しがガイド活動の原動力です。

(インタビュー!文責:出版部会 比叡谷真) ひえにまこと

教務所からのお知らせ

《常磐会館報恩講について》

本年も新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の対応のため、会場である大講堂の座席数が五十席と限られていることから、常磐会館責任役員・総代を中心とし、人数を制限してお勤めをさせていただきますのでご了承ください。なお後日、法話動画（講師 廣瀬 俊氏／大阪教区法観寺）を京都教区のホームページに配信する予定です。



過去の常磐会館報恩講法話も配信中！ 写真は2021年の墨林浩氏による法話。
※教区ホームページの「法話動画」よりご覧ください！

《振込用紙での送金について》

振込用紙（振込料教務所負担）であっても、現金で送金を行う場合、1件につき110円の加算料金が振込人本人の負担となりますのでご注意ください（2022年1月～）。なお、ゆうちょ銀行口座からの送金であれば、加算料金はかかりません。

イマダカラ

以前ある方に言われたこと。「若者の寺離れを嘆く声をよく聞く。働き盛りの者が寺に足が向かないのは自分自身も若かりし頃はそうだった。親や同年代の友人との死別を通じて今、少しは寺と縁のある身になった。聴聞の場を用意するのは寺の役目であると思う。ゆりかごから墓場まで、という言葉があるが、幼少年や高齢者、もちろん若者に向けて働きかけることは大きなことで、これからはしていかなければならないと思うが、どうだろう。超高齢化社会の世で実際に自分の身が死に際しているとか、いのちの問題を正面から考えるようになった時には身体不自由の状態になり自らの足で寺参りが困難な状況になった者に対して、あんた方坊さんは足手を運び仏法を伝えるということ積極的にやっているのか」。

当時、京都在住の私は、すぐさま近隣の特別養護老人ホーム、病院、デイサービス等に連絡して、受け入れていただいた施設にボランティア法話に伺った。ただ相手のお話を聞くのみ、の場になったり、人生の先輩から種々アドバイスを受けることもあった。概ね好感触で喜んでいただけていると感じたが、前回伺った時には涙を流して手を握って喜んでくれた方が、次の月には「どちらさんですか？」というような状態になることも多々あった。一歩進んで二歩下がる状態だったが喜んで下さった方の笑顔が今も忘れられず、支えられての聴聞の場であることを忘れないように心がける今現在。

（出版部会 杉本 智海）

編集後記 the editor's note

最近、『教区だより』読んだよ、というお声をかけていただくことがあります。とてもありがたいことです。

私自身、ふと文章に目がとまって、『教区だより』に載っている言葉につかまれたことがありました。場をひらきつづけることが私たちの仕事だ、と先輩方からくり返し教わってきたことを思うにつけ、『教区だより』編集に携わる今は、言葉を伝えつづけることを大事にしたいと考えています。

言葉を伝えるためには、まず手に取って読んでもらうための工夫も大切だと、先日、執筆者からご指摘いただいて、あらためて感じました。表紙のリニューアルを皮切りに、言葉に出遇うきっかけづくりにも取り組んでいきたいと思ひます。

我が身を立ち上がらしめる言葉を教区の皆さんに届けられるよう、これからも模索をつづけます。
（出版部会 比叡谷 真）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第390号

発行人 篠岡 誓法(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075(351)5260 Fax : 075(351)5256

発行日 2022(令和4)年10月1日

メールアドレス: kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

